2021 年 3 月 26 日

図書館協議会第二特別委員会

京都大学図書館機構による学術情報リテラシー教育の検証

1. はじめに

本報告書は、京都大学第 3 期中期目標・中期計画期間（平成 28 年度/2016 年度-令和 3 年度/2021 年度）の最終年度を迎えるにあたって、同期間内に京都大学図書館機構（以下、図書館機構）が行ってきた学術情報リテラシー教育の検証を行った結果に基づいている。

大学図書館による学術情報リテラシー教育は、館内ツアーや図書館利用案内といった日常業務に含まれるものから、データベースや論文執筆に関連した講習会、そして授業の提供と多岐にわたる。さらに図書館機構の場合は、約 40 の図書館・室から構成されており、各図書館・室の人員配置や運営形態は実に多様である。

本報告書では、図書館機構の構成館・室による多様な活動を個別に評価するのではなく、図書館機構全体として、学術情報リテラシー教育をどのような方向性に向かって展開してきたかという観点から評価を行う。図書館機構は 2005 年 4 月に発足した。2009 年以降は機構として将来構想を策定し、緩やかにではあるが、機構を構成している図書館・室が部局を超えて京都大学の研究・教育を一体的に支えていく姿勢が浸透しつつある。

具体的には、図書館機構が発足した後、図書館協議会の方針に対応する形で、実務レベルで全学の学術情報リテラシー教育を担ってきたリテラシー・レファレンス部会の活動と、全学共通科目「大学図書館の活用と情報探索」に重点を置いた。リテラシー・レファレンス部会は、図書館機構内の図書館・室で学術情報リテラシー教育を担っているサービス系の職員として構成されており、図書館機構内の学術情報リテラシー教育に関する情報共有や、企画などを行っている。分析の対象としたのは、前者に関しては期間中の同部会議事録と、同部会が集計した各年度の講習会のまとめの 2 点である。また後者に関しては、これまで演習補助者を担当した職員のアンケートとインタビューを行った。

全学共通科目「大学図書館の活用と情報探索」は、1998 年に「情報探索入門」というタイトルで開講された。毎年、学生アンケートという形で受講者による評価が行われてきたが、図書館機構による活動として、演習補助者として授業を担当する職員らにとっての意義は検討されることがなかった。また、本授業が、図書館機構による学術情報リテラシーの中で、どのように位置づけるべきかいう点についても深く議論されることがなかった。今回の調査では、過去の演習補助者のインタビューを通して、「大学図書館の活用と情報探索」のみではなく、京都大学における学術情報リテラシー教育に関する意見を得られた。

本報告は、2 節で大学図書館による情報リテラシー教育の歴史を概観した後、3 節から 5 節で京都大学図書館機構における実践を具体的に検討している。そして 6 節で、今後に向けた課題を提示している。

なお、本報告では、京都大学による実践に言及する際は、「図書館機構による学術情報リテラシー教育方針」（平成 29 年 2 月 24 日図書館協議会承認）に基づき「学術情報リテラシー」で統一して記述しているが、より一般的な場面では「情報リテラシー」としている。

2. 大学図書館による情報リテラシー教育の概略

資料の収集・整理・提供という図書館の役割に加えて、それらの資料を有機的に活用するスキルを教授する利用者教育が日本の大学図書館で盛んになったのは、1990 年代のことである。アメリカの大学図書館では 1970 年以降、library instruction（LI）、bibliographic instruction（BI）いう呼称で取り組まれるようになった。1980 年代には、LI や BI の必要性や意義がより活発に論じられるようになった（例えば Fisher etc. 1984; 大城 2002）。

同じ時期に情報技術の教育現場への導入が進んだ結果、図書館員が一翼を担いつつも、LI や BI のように図書館内で完結しない情報リテラシー教育の必要性が認識されるようになった（大城 2002）。2000 年には、大学研究図書館協会（Association of College and Research Libraries: ACRL）が「高等教育のための情報リテラシー能力基準」を発表した。同基準では、情報リテラシーを「存在するニーズを満たしてくれる情報に効果的にアクセスし、評価する能力である」と定義し、生涯学習の基礎として、大学のカリキュラムの中に位置づけるべき課題として示した（Association of College and Research Libraries 2000, 大城 2002）。

ACRL は 2015 年に、「高等教育のための情報リテラシー能力フレームワーク」発表した。このフレームワークでは、メタ認知（meta literacy）の必要性が強調され、情報が作成される過程を理解するなど、批判的な情報リテラシー能力の習得に向けた内容となっている（ACRL 2015 ; 小田 2016）。「基準」と比較すると、技術ではなく思考法を身に着けることが重要視されており、利用者を取り巻く情報環境の変化に十分対応できる内容となっている。ACRL は、同フレームワークを参照しつつ、各機関の関係者間で十分に議論を深めた上で実践に移すこと、また実践例を共有することを推薦している（Association of College and Research Libraries 2015）。

LI や BI、そして情報リテラシー教育が定着する中で、2000 年以降は、これらの実践が学生の学習に与えた効果の分析結果をエビデンスとして、大学図書館の意義を示していく手法の検討も進められている（例えば Blummer and Kenton 2017; 矢野 2017）

一方日本では、日本の大学図書館の場合は、図書館による情報リテラシー教育の一環として、授業、授業支援、オリエンテーションなどの利用者教育を位置付けることが一般的である。利用者教育が盛んになった時期はアメリカとそれほど変わらないが、ACRL の「基準」が示すような形で、大学の授業カリキュラムに組み込んだ情報リテラシー教育は限定的である。ただし、2000 年代より大学全入時代と前後して、特に初年次を対象とした授業の中の一コマの提供を受けて行う利用者教育は、多くの大学で実践されてきた（慈道 2009）。

授業カリキュラムに組み込まれた情報リテラシー教育は、それほど事例が多いわけではないが、1998 年から全学共通科目で半期の授業を提供している京都大学をはじめ、いくつ

かの大学で実践されている。

また、国立大学図書館教育協会が 2015 年に『高等教育のための情報リテラシー基準』を公開しており、大学図書館による情報リテラシー教育に対して、一定程度の参照軸が提供されている。

3. 図書館機構による学術情報リテラシー教育とその評価

3.1. 学術情報リテラシー教育の実施実績と傾向

リテラシー・レファレンス部会は、2013 年度より、図書館機構内で開催されている学術情報リテラシーに関する講習会や授業支援などを網羅的に収集した上で内容や対象など記載した一覧であるリテラシーマップを作成している。2014 年度からはリテラシーマップをもとに活動状況の集計・分析し、年度によっては、「京都大学図書館機構学術情報リテラシー支援の現状」を作成している。年度によって集計方法などにばらつきがあるため、2017 から 2019 年度のリテラシーマップの情報を参考に再分類をすると表 1 のようになる。

＜表 1：講習会の内容＞

種別	2017 年度	2018 年度		2019 年度	
	企画数	企画数	開催数	企画数	開催数
授業支援＋	11	11	45	14	56
授業支援（大学院）＊＋	0	2	3	2	2
授業支援（留学生）＋	1	1	1	1	1
新入生ガイダンス	11	10	14	12	17
新入生ガイダンス（大学院）＊	8	9	12	4	7
新入生ガイダンス（留学生）	2	2	4	3	5
留学生ガンダンス	0	0	0	1	3
図書館利用	4	4	6	4	4
全学共通科目＋	1	1	14	1	12
大学院共通科目＊＋	0	1	3	1	3
大学院共通科目（英語）＊＋	0	0	0	1	1
文献管理ツール	2	4	15	3	11
文献検索	4	2	4	4	7
文献検索(英語)	0	0	0	1	1
文献検索（中国語）	1	0	0	1	1
特定のデータベース活用法	9	9	20	3	3
医学情報	5	6	6	5	5
論文執筆（中国語）	0	1	1	0	0

レポート執筆	3	5	39	3	38
実験レポート	0	1	2	0	0
研究公正	0	1	1	0	0
研究手法＊	0	1	1	0	0
研究成果発信＊	5	9	9	4	4
LateX（日・英・中）	0	1	4	1	9
学術的日本語講座(インドネシア語)	0	0	0	1	1
学振申請＊	0	0	0	1	1
数値シミュレーション	0	0	0	1	1
プレゼン	0	1	1	0	0
FD	2	2	3	2	3
その他	5	4	5	2	7
合計	74	88	213	76	203

＊は特に大学院生以上を対象としている

＋は大学の正規教育のカリキュラムに組込まれている学術情報リテラシー教育

これらの講習会などの開催時期としては、例年 4 月から 5 月が新入生向けのオリエンテーションや、授業の 1 コマ内で行う授業支援の形式をとる学術情報リテラシー教育が最も多い。次いで、10 月・11 月に、4 月・5 月開催数の約半数の講習会・授業支援などが行われている。また、秋学期から入学した留学生向けのセミナーなども開催されている。一方で、附属図書館やリテラシー・レファレンス部会による出版に関するセミナーや、粗悪学術誌に関するセミナーなど、院生以上を対象とした活動が増加している。課題としては、学部の学年が進んだ際に、それぞれの学習段階に対応した講習会が手薄であることが挙げられる。

「京都大学図書館機構学術情報リテラシー支援の現状」において、実施図書館・室の具体名が挙げられているのは 2019 年のみだが、学部図書館・室のうち、法学部図書室以外は実施している。

開催活動の主体としては、図書館員がメインであるが、附属図書館では、院生スタッフによる学部生向けの講習会も数多く開催している。その年々のスタッフの構成によって、実験レポートの書き方、LaTeX の使い方、プレゼンの工夫、留学生向けの文献収集など、柔軟な企画が行われている。これらの院生による講習会の中には、先述した初年次以外の学習段階に対応した内容を提供しているものが含まれている点は、重要であろう。

このうち、図書館機構としての取組みは、例年新年度に新入生を対象として行っている図書館機構内の図書館・室のスタンプラリーである「Library Walk」と全学共通科目に加えて、ここ数年はリテラシー・レファレンス部会が主体となって、外部講師を招聘した論文投稿・出版に関するセミナーなどを開催している。なお、2020 年度は、新型コロナウィルス

感染症の拡大により、多くの講習会がオンライン化された。これらのオンライン講習会は、附属図書館と吉田南総合図書館を中心に、リアルタイムだけではなく、録画の配信もしており、時間と場所に縛られない新しい形での学術情報リテラシー教育を提供している。

3.2.「学術情報リテラシー教育支援のためのルートマップ」の作成

2015 年に国立大学図書館教育協会による『高等教育のための情報リテラシー基準』が公開されたことを一つの契機として、リテラシー・レファレンス部会内でも、京都大学の教育に対応した同様の基準の策定が議論されてきた。2018 年度より、同部会の案をもとに、第二特別委員会や附属図書館研究開発室会議などでも、検討が繰り返され、2020 年度「学術情報リテラシー教育支援のためのルートマップ ver.1」が完成した。本ルートマップは、学部から修士課程までの京都大学における学習と研究を想定した内容になっている（参考資料１）。

本ルートマップは、図書館機構の HP で公開され、ルートマップの各項目に対応した、図書館機構内の講習会などが利用者に分かるように情報の整理が進められている[1]。また、2020 年度以降の講習会は、ルートマップの項目に対応させて集計を行う予定であり、今後は、図書館機構内の学術情報リテラシーの現状把握と分析が容易になると考えられる。

ルートマップは、京都大学における教育・研究に対応させた情報リテラシー教育を行うためのツールとして、また、京都大学図書館機構の活動を可視化し、利用者に分かりやすく伝えるためのツールとして活用されるであろう。ルートマップの作成は図書館機構による学術情報リテラシー教育の基盤形成として、高く評価できる。

今後は、ルートマップの英語版を早急に作成し、留学生向けの学術情報リテラシー教育の指針とするとよいだろう。

4. 全学共通科目「大学図書館の活用と情報探索」による情報リテラシー教育

1998 年に開始した全学共通科目（当時の授業名は「情報探索入門」）は、当時の長尾真総長が附属図書館長であった平成 9 年に構想された授業である。授業開講の意図は主に、図書館が中心となって情報活用方法をシステマティックに教授するということと、学内における図書館員のプレゼンスを上げることの 2 点であった（慈道 1998）。

開講から 22 年が経過し、情報リテラシー教育が大学図書館の重要な役割の一部であるという認識は、全国の大学図書館で概ね定着した。また、授業が始まった当初よりもさらに情報源が多様化・複雑化しているという社会環境の変化や、学術における研究公正をめぐる認識の共有が進んだ結果、情報リテラシー教育の重要性は増している。一方で、図書館機構内では、定員削減が進み、演習補助者を担当できる職員が減少していっている。

---

[1] 「学術情報リテラシー教育支援のためのルートマップ ver.1」【URL：https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/support/1386878】（最終アクセス日：2021 年 1 月 31 日）

本節では、過去の演習補助者へのアンケートとインタビューを通し、図書館員の視点を取り入れながら、全学共通科目「大学図書館の活用と情報探索」の意義と、図書館機構による学術情報リテラシー教育における位置づけについて検証する。なお、アンケートは過去に演習補助者を担当した 80 名に送付し、58 名の回答が得られた。うち、25 名が各 1 時間のインタビューに応じてくれた。

4.1. 全学共通科目「大学図書館の活用と情報探索」の実施体制と課題

全学共通科目「大学図書館の活用と情報探索」は、開講当初から文・理複数の教員と図書館員がチームを組み行ってきた（参考資料 2 のシラバス参照）。図書館員が継続して授業に関わることにより、全学共通科目の当初の目的であった図書館員のプレゼンスを上げることは達成できた。例えば、学生の授業アンケートにおいて、図書館員が演習補助者を行っていることが常に高い評価を得ていることや、他の全学共通科目（「情報基礎演習」「大学院共通科目・学術研究のための情報リテラシー基礎」）の一コマを図書館機構が担当するようになったことも、これまでの全学共通科目における授業によって図書館員のプレゼンスが上がった証左であろう。

近年の大きな課題は、履修者数の低下と（表 2 を参照）、開講当初の演習補助者の担い手であった新人が採用されないことの 2 点である。

受講人数の低下は、授業内容にアクティブ・ラーニングが取り入れやすくなるなど、授業の質の点からは必ずしも否定的な結果ばかりではないが、これまでも問題視されてきたことである。また、新人の採用人数の低下による、職員への負担の増加が明らかになっている。開講当初は、多くの演習補助者が 3 年間担当していたが、グラフ 1（参考資料 3 の 1 から抜粋）によると回答者は平均 6.3 年担当しており、最長で 9 年間担当していた。

＜表 2：　全学共通科目「大学図書館の活用と情報探索」履修登録者数の推移＞

（人）

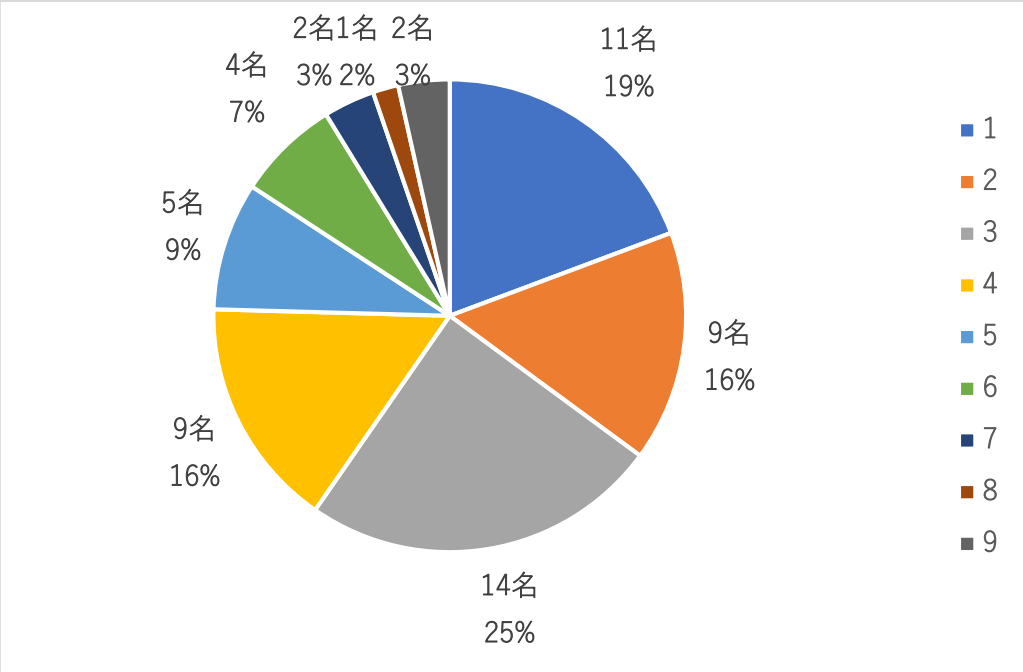
	総人	文	教育	法	経	理	医	薬	工	農	合計
H10 年度	5	4	2	3	21	27	15	8	130	13	228
H11 年度	14	5	6	13	22	32	17	5	94	19	227
H12 年度	6	6	13	22	26	31	3	15	142	21	285
H13 年度	11	1	4	2	12	21	5	10	64	10	140
H14 年度	15	16	5	10	9	13	2	14	69	17	170
H15 年度	8	1	5	5	14	29	3	1	41	10	117
H16 年度	2	3	6	8	11	21	1	0	28	8	88
H17 年度	5	7	2	6	15	14	19	3	69	11	151
H18 年度	9	5	6	3	8	6	8	0	47	15	107

H19 年度	1	6	4	9	9	4	4	0	51	15	103
H20 年度	4	5	4	12	6	20	7	1	46	11	116
H21 年度	6	5	1	13	5	14	2	0	42	9	97
H22 年度	5	11	2	6	3	5	4	2	27	2	67
H23 年度	4	10	0	6	6	2	5	0	32	1	66
H24 年度	4	5	0	10	3	6	5	6	18	0	57
H25 年度	2	15	2	3	8	3	3	3	5	2	46
H26 年度	3	8	0	1	0	1	1	3	3	0	20
H27 年度	2	11	1	0	0	0	0	0	1	5	20
H28 年度	11	5	4	0	0	1	1	0	1	3	26
H29 年度	4	9	2	0	0	1	0	0	0	2	18
H30 年度	6	9	1	0	2	2	0	0	0	2	22
R 元年度	2	26	3	0	0	1	0	0	2	6	40
2020 年度	2	9	3	0	1	1	2	0	0	1	19

＜グラフ１：演習補助者を担当した年数＞

担当年数（年）	1	2	3	4	5	6	7	8	9
人数（人）	11	9	14	9	5	4	2	1	2

*有効回答 57 件



インタビューから、一部の職員に負担が重なる背景には、①演習補助者への依頼が頼みやすい人に集中する傾向がある、②上司の許可が必要なので、職員の授業参加に理解のある上司の部下に集中やすい、③遠隔地キャンパス等の職員に頼めない、④主な担い手であった新人が採用されず、定員削減により職員数自体が減少しているなど複数の理由が考えられる。

演習補助者を担当した際の負担については、アンケート回答者の 74%が授業準備を挙げている（参考資料 3・3)。一方で、アンケートでもインタビューでも、演習補助者が主体的に演習の内容を決めたことからくる達成感や、授業へのコミットメントが高まることによって演習補助者の授業内容への理解が高まったことなどを挙げている。

4.2. 演習補助者を経験することの意義

演習補助者を経験することについては、アンケート回答者の 94%が「意義がある」と回答していた（参考資料 3・8)。具体的には、①京都大学における情報リテラシー教育の概要を理解できたことや、②実践的な環境の中で教壇に立つ機会があったこと、③所属部署に関わらず、学生に直接接する機会があったことなどが挙げられており、インタビューでも同様の回答が多かった（参考資料 3・8)。

③の大学図書館の最大の利用者である学生に接することの意義についてインタビューから補足する。新人の場合は、教えられる側から教える側への移行が印象に残るようだったが、よりベテランの回答者からは「新人以外の人は、管理系でも学生から離れていくので、学生の今しかない（4 年から 6 年）という感覚を忘れないようにするためにもよいのでは。チームの中で新人ともフラットに議論できる経験になる」といった意見が出ていた。

演習補助者を経験することが、レファレンスや文書作成の能力を身に着ける機会となり、図書館員としての能力の下支えになっているという意見もあった。レファレンスサービスでは、情報源に精通することと質問者がどこで躓いているかを正確に把握する必要があるが、演習補助者として授業に参加することにより、図書館員のレファレンススキルを訓練する機会になっている。

インタビューではまた、新人時代に担当することの意義についても併せて質問したところ、殆どの回答者が、①他部署の図書館員と同じ立場で仕事ができたことや、②採用 2 年目と早い段階でチーフを任され、教員との連絡やチームのまとめなど責任を伴う仕事を担当できたことなどを挙げていた。

4.3. 講習会との相互補完

インタビューでは、図書館機構による学術情報リテラシー教育全体の中で、どのように授業を位置付けるかという点について、講習会など日常の図書館業務で行われている活動と関連付けて話を聞いた。アンケートでも記述されていた実践的な環境という点に加え、図書館に足を運ばない学生に対して学術情報リテラシー教育を教授することの意義が挙げられた。図書館が行う講習会に参加するような日ごろから図書館に興味がある学生以外の潜在

的な利用者に対して、どのようにアプローチできるかは、どの図書館・室でも共通の関心事である。オンラインによる発信とともに、そのような潜在的な利用者への働きかけは、今後も授業や授業支援を通して行っていく必要があるだろう。

また、授業で取り組んだ内容や扱ったツールを職場の講習会に取り入れることのメリットを強調する回答も複数みられた。演習補助者経験者が増え、常に循環していくことで、図書館機構全体の学術情報リテラシー教育が発達していくことが理想であり、全学共通科目と講習会とが相互補完関係となることの重要性が指摘された。

4.4. 授業の内容や手法の工夫

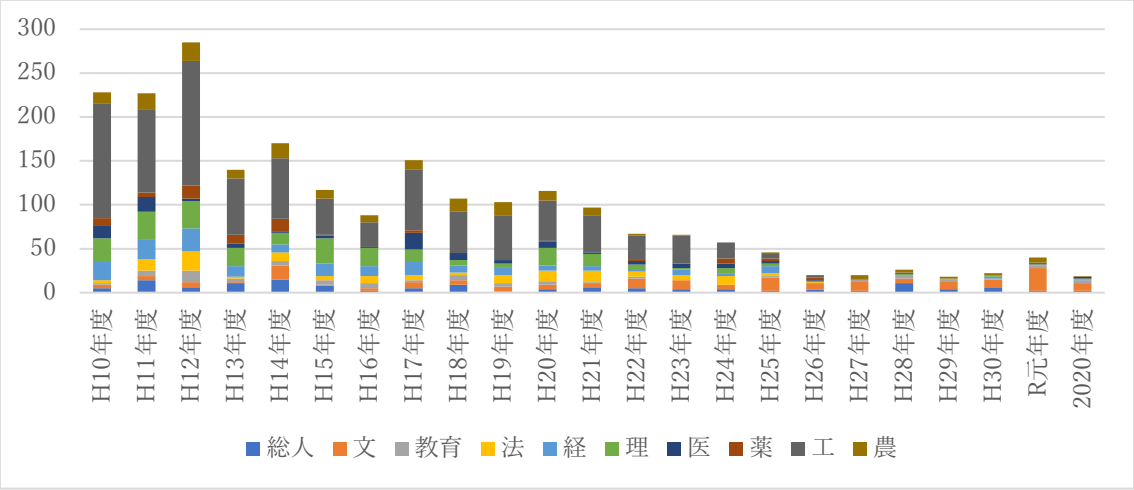
授業の内容については、インタビューでは、参考資料の使い方や分類演習など、図書館という知の歴史的な文脈を伝える場で学ぶユニーク授業内容である点や、図書館員自身が教科書的ではない学術情報リテラシーを学びながら教授していく内容である点など、総じて評価が高かった。また、参考資料 3・1 で分かる通り、開講当初の枠組みを継承しつつ、時代の変化に応じて教授方法が変更されている点が、演習補助者としては苦労も多いが、意義を感じる点であった。大きな変更点としては、2012 年から 2014 年にかけて、アクティブ・ラーニングの導入に対応するかたちで、グループワークを取り入れ、総合演習で発表を行うように変更したことや、2017 年から反転授業を取入れた点などが挙げられる。

インタビューの中では、現代のような情報社会では、これまで行ってきた狭い範囲での学術情報を対象とした学術情報リテラシーではなく、より広く情報リテラシーを教授する必要性があるという指摘があった。この背景には、学術情報の入手先に限ったとしても、図書館が提供している情報のみでは不十分で、SNS を含めた多メディアの活用が不可欠である。また、学術情報と日常的に接する情報の境界があいまいになっていること挙げられる。後者に関しては、例えば国際関係や感染症対策などを念頭に置くと分かりやすいだろう。今後は、図書館が提供している学術情報の活用を主としつつも、メディアリテラシー教育を導入することで、高度な専門能力をもつ人材の育成の一端を担う必要がある。なおこの点については、既に講師の間でも検討していたことであり、2021 年度からメディア情報のファクトチェックを授業内容に取り入れる予定である。

4.5. 履修生の減少とその対策の状況

履修生の減少については、実際にどのように履修生が変容したのかを確認した上で、その理由を考えたい。＜表 2＞をもとに履修生の所属別にグラフにすると、開講当初履修生の 5 割以上を占めていた工学部生が現在ではほぼ履修しておらず、文学部と総合人間学部の履修生が中心となっていることが分かる。この変化には、二つの理由が考えられる。一点目は、当初は正規科目の中で学術情報リテラシー教育を提供していたのが本授業のみであったが、2012（平成 23）年度から開始した、工学部の 1 回生を対象とした「工学系学術情報リテラシー」を皮切りに、「授業支援」という形で大学の正規カリキュラム内に組込まれることが

増加したことである（表 1 参照）。2 点目としては、文・理双方の教員がチームで担当し、学問分野に関わらず、総合的な学術情報リテラシーを教授する内容であることが、潜在的な履修生に十分に伝わっていないということが考えられる。



＜グラフ 2：履修生数と履修生所属の推移 H10（1998）年度-2020 年度＞

授業の反省会・関係者会議などからは、履修生の減少については、これまで検討と対策が繰り返されてきたことが分かる。具体的には、2001（平成 13）年度に半減した際には、工学部 2 回生の減少が著しかったことが指摘されている。同年の反省会ではまた月曜日 5 限から金曜日 5 限に開講曜日が変更され、結果的に教員免許目と重なっていたことが激減の一因はないかと分析している。なお、履修対象は、当初は 2 回生以上を対象としており、1 回生が履修対象に含まれるようになったのは 2005（平成 17 年度）以降である。

2010（平成 22）年度に大きく減少し、翌年も回復が見られなかった際には、特に理系の履修生が減っていた。開講時期を前期から後期の月曜 2 限に変更したことによるという見方が示されている。さらに 2012（平成 23）年度からは、工学部の 1 回生を対象とした「工学系学術情報リテラシー」が必須になり、工学部の学生の履修者はその後減少する一方となった。2013（平成 25）年度に減少した際は、同年に国際高等教育院が CAP 制度を導入したことも関係があるのではないかという意見がでた。また、当時の授業が月曜 2 限に開講されていたことが、学生には履修しにくいという意見があり、2014（平成 26）年度には、比較的必修科目が少ない水曜 4 限に開講時間が変更された。2015（平成 26）年度は、開講当初から授業を担当していた教員が退職した際に、担当教員が集合して授業の内容について詳しく議論した結果、授業の初年次教育としての役割を重視し、2017（平成 28）年度からは、前期に開講することになった。

このようにその時々で様々な対策を行ってきたが、履修生の減少傾向に変化は見られな

かった。

4.6. 今後に向けた全学共通科目の見直し

アンケートとインタビューから分かるのは、担当者の負担の増加に反して、受講生が少ないという現状はあるが、演習補助者を経験すること自体は、京都大学図書館機構の構成員として重要であるとの意識が定着していることである。しかし、図書館が中心となって情報活用方法をシステマティックに教授するという全学共通科目の当初の目的を考えれば、履修生が定員を下回る状況は改善するべきである。ただ、この目的は、全学共通科目の授業だけでなく、図書館機構全体の方針や理念の下で、図書館員にとってもより有意義な形で達成する必要がある。授業の受講生が少ない中で、学術情報リテラシーをより多くの学生に広めていく方策について尋ねたところ、回答者の多くから授業内容をオンラインで公開していくという提案が出された。例えば、①図書館機構で学術情報リテラシーに関するポータルを立ち上げて、授業内の演習や授業に関係ない講習会のコンテンツを挙げる方法や、②PandAなどを活用し、単位は不要だが、順番に受講する必要があるオンラインコースを立ち上げるという案が出されており、授業という形ではない方法で学術情報リテラシーをより多くの学生に広めていくことが有効ではないかと考えられている。

同時に、正規教育の中でより多くの授業支援に力を入れることも検討できるだろう。これらの授業支援の詳細については、5 で述べる。

2020 年度は Zoom を使ったオンライン授業形式で開講したため、コンテンツ動画を作成したチームが多かった。また、在宅勤務で参加した演習補助者もみられた。担当者の負担の増加に対して、このような、オンライン授業で蓄積されたノウハウとコンテンツを活かすことで、2021 年度以降の授業準備を効率化する、ティーチング・アシスタントを更に導入する等、対症療法として演習補助を行う図書系職員の負担を軽減することが考えられるが、より抜本的な見直しを行う時期がきているといえるだろう。

5. 全学共通科目以外の授業支援

図書館機構は現在、全学共通科目「大学図書館の活用と情報探索」以外にも、以下のような授業支援を実施している。

5.1. 大学院共通科目「学術研究のための情報リテラシー基礎」

大学院から京都大学に進学する学生が増加したこともあり、2018（平成 30）年度より開講された「学術研究のための情報リテラシー基礎」（1 日集中・0.5 単位）において、附属図書館研究開発室教員が、学術情報リテラシー教育を一コマ担当している。この授業では、研究サイクルにあわせた学術情報の収集・活用と、論文不正に関わる問題、オープンサイエンスに向けた取り組みなどを扱っている。2019（平成 31）年度以降は、留学生に向けて英語での授業も提供している。土曜日に集中的に履修できることもあり、受講生はこれまでのと

ころ合計 150 人前後である。前述の通り、講習会などでも大学院生向けの取り組みが増えているが、情報系のリテラシーとともに、研究成果の発信を見据えた学術情報の収集・発信について大学院入学時に正規のカリキュラム内で提供することは意義があるといえる。

5.2. その他の授業支援

図書館機構が主体として関わっている全学共通科目・大学院共通科目以外に、授業の 1 コマや半コマを担当し、学術情報リテラシーの基礎を提供する授業支援についても、提供の機会が増えている。2012（平成 23）年度から始まった、工学部の 1 回生を対象とした「工学系学術情報リテラシー」（必須科目）を皮切りに、図書館機構として協力している「情報基礎演習」や、吉田南総合図書館が協力している複数の全学共通科目などに加え、医学図書館、農学図書館、文学部図書館などの部局図書館でも授業支援の機会が増えてきている。「情報基礎演習」では、授業担当者が分担執筆している教科書に、学術情報の検索と文献管理ツールの活用に関する章を提供しており、毎年更新して機関リポジトリ KURENAI にて広く公開している。

「情報基礎演習」の場合は、全学共通科目「大学図書館の活用と情報探索」のエッセンスを凝縮させた授業内容になっているが、部局図書館が協力する場合は、「専門分野の学術情報についても伝える機会であるため、今後もより多くの部局図書館で取り組まれることが望ましい。また、必須科目などは、受講生の数が多いため、より多くの学生に学術情報リテラシーを習得させる上でも、授業支援は有効な手段である。

5.3. 今後の課題としての 研究支援の充実

その他、学術情報リテラシー教育を通じて、図書館機構の学術情報資源をより有効かつ適正に活用を促す必要があるテーマとしては、論文不正、オープンアクセス、オープンサイエンス、粗悪学術誌への注意喚起など、研究支援に踏み込んだ内容が挙げられる[2]。今後、研究支援を充実させていくためには、サービス系の部署でない職員や、研究支援室職員、教員が講師として教授する機会などをより積極的に設ける必要がある。なお、大学院生以上は、日本語での活動を前提としない留学生が多いため、研究支援に関連する学術情報リテラシー教育のコンテンツは、少なくとも日・英二言語での発信が望ましい。

6. 今後に向けて―図書館機構における学術情報リテラシー教育支援の変革

以上を踏まえ、図書館機構による学術情報リテラシー教育の課題を以下に示す。

6.1.学術情報リテラシー教育に関する全学的な理念の構築

[2]「京都大学研究公正推進アクションプラン」（平成 27 年 3 月採択）に基づいて、図書館機構では主に文献検索などとあわせて学生・大学院生・教員に対して、公正な学術活動についての教育や啓発を今後も推進に取り組んでいる。研究支援として挙げた活動は、同アクションプランの一環として位置づけられる。

図書館機構が 2005（平成 17 年）年に発足して、すでに 15 年以上たったが、学術情報リテラシー教育に関しては、部局の集合体を超えた一組織としての方向性が十分に共有されていない。2017（平成 29）年には、「図書館機構による学術情報リテラシー方針」が策定されており、理念と実務の中間に位置づけられるような具体性を含む指針があり、2020（令和 2）年には、「学術情報リテラシー教育支援のためのルートマップ」が作成され、京都大学の教育・研究に即した学術情報リテラシー教育の在り方を具体的に示している点で評価できる。一方で、より抽象性の高い理念は示されてこなかった。

今後は、「学術情報リテラシー教育支援のためのルートマップ」起点として、講習会の再構成など実務分野の充実を図ると同時に、「図書館機構による学術情報リテラシー方針」より抽象性が高く、すぐに実現できる目標というよりは、ある程度の理想を含んだ理念の共有を行うことが望ましい。例えば、京都大学の基本理念を踏まえ、高度な専門能力をもつ人材の育成の一環として、より多くの学生に学術情報リテラシーを獲得させる、というような理念が必要である。理念形成に向けては、例えば、ACRL による「高等教育のための情報リテラシー能力フレームワーク」で強調されているメタ認知を、京都大学の教育・研究に当てはめて検討しながら、意見を共有するということでもよいだろう。実務のみではなく理念を共有することで、京都大学図書館機構としての学術情報リテラシー教育の方向性を示すことができる。

また、全学共通科目「大学図書館の活用と情報探索」は、図書系職員のプレゼンスを高めるという当初の目的は達成しているが、新規採用職員が減少し、本授業にかかわる職員が固定化している実態からは、本授業による図書系職員の育成の効果は低くなっていると考えられる。図書館機構における学術情報リテラシー教育の理念に基づき、全学共通科目だけでなく、他の授業も見渡して、図書系職員による学術情報リテラシー教育支援の目的を見直し、実施方法を改善することが必要である。

6.2.情報の発信と共有を行うための全学プラットフォームの整備充実

3.1 で概観した通り、京都大学図書館機構を構成している図書館・室が提供している学術情報リテラシー教育の機会は一様ではない。所属学部に関わらず、さまざまな機会が提供できるように、学術情報リテラシー教育ポータルを構築するのが望ましい。仮に図書館で開催した講習会の当日参加者が少なかった場合でも、ポータルを通して後に再生する利用者がいれば、必要な利用者に必要な時期に届けることが可能になるだろう。

図書館から利用者に向けた情報の発信を共有していくプラットフォームに加えて、図書館員間での共有に対するニーズも高い。例えば、本報告書の評価対象期間の比較的初期の平成 28 年度第 3 回のリテラシー・レファレンス部会（2017 年 3 月 14 日）議事要録に挙げられている、平成 28 年度第 9 回業務推進会議における意見交換会で得られた課題からもそのことがわかる。具体的には、「A. 再利用可能な形での資料の共有 B. e-Learning 活用についての検討 C. 各図書館・室が実施している情報リテラシー教育の取り組みに関する情報共有」

が記載されている。

情報共有のニーズは、2021 年現在でもあまり変わっておらず、元演習補助者のインタビューでも、複数の図書館員が、学術情報リテラシー教育を全学的に行うためには、コンテンツやすでに行った講習会・研修のアンケート結果の共有が重要であると強調していた。利用者に向けたポータルに加え、図書館員の間での情報共有を行うためのプラットフォームづくりが望まれる。利用者向けポータルとしては、既に図書館機構のサイトに「学習/研究サポート」という Web ページを設けており、この Web ページを活用していくことが考えられる。また、図書館員間の情報共有については、これまでも Web ページを設けており、共有フォルダの活用など、より効果的な情報共有を目指して模索を続けている。

6.3.学部上回生への支援の明確化

現在の学術情報リテラシー教育の範囲は研究支援に及んでいるが、一方で、3.1 で示されている通り、学部上回生への学術情報リテラシー支援は限定的である。学部上回生は、専門分野などによって個別の対応が重要になる局面もあるので、学習サポートデスクの院生スタッフと協同するなどし、研究支援と教育支援の間を埋めていく学部上回生向けプログラムの立案が必要であろう。

以上

参考文献

Association of College and Research Libraries. Information Literacy Competency Standards for Higher Education. 2000. https://alair.ala.org/bitstream/handle/11213/7668/ACRL%20Information%20Literacy%20Competency%20Standards%20for%20Higher%20Education.pdf?sequence=1&isAllowed=y（参照 2021-02-02）

Association of College and Research Libraries. Framework for Information Literacy for Higher Education. 2015. http://www.ala.org/acrl/sites/ala.org.acrl/files/content/issues/infolit/Framework_ILHE.pdf （参照 2021-02-02）

Blummer, Barbara and Jeffery M. Kenton. Academic Libraries and Student Learning Outcomes. Academic Libraries. 2017, 19(1), p.75-87.

Fisher, William H.; Kirk, Thomas G.; Morton, Bruce; Oberman, Cerise.; Smalley, Topsey N.; Schwartz, Barbara A. Why Bi or Li: A Forum. Reference Services Review. Spring 1984, p. 59-66.

大城善盛. 情報リテラシーとは？―アメリカの大学・大学図書館界における議論を中心に―. 情報の科学と技術. 2002, 52(11), p.550-556.

小田光宏. ACRL 高等教育のための情報リテラシーの「枠組み」 −白熱する議論に向けて. カレントアウェアネス. 2016, (327), p.24－27.

慈道佐代子.全学共通科目「情報探索入門」の試み-図書館の役割について. 静脩. 1998, 35(1), p. 5-6.

慈道佐代子.情報リテラシ―と利用教育―大学図書館と公共図書館―. 図書館界. 2009, 61(5), p. 495-510.

矢野恵子. 大学図書館における情報リテラシー教育のアウトカム・アセスメント手法. 大学図書館研究. 2017, 105, p. 42-48.

図書館機構による学術情報リテラシー教育支援のためのルートマップ

2020.08.05
Ver.1

レベル 行動指標	基礎 レポート・論文を作成する際に、京都大学で利用できるツールを把握している。	初級 与えられたテーマ・情報源をもとにレポートを作成できる	中級 与えられた課題について自らテーマを設定し、先行事例を踏まえた上で自らの意見を含んだレポートの作成・発表ができる	上級 自ら調査・研究テーマを設定し、学術的な論文の作成・発表ができる	研究での実践 研究の現場において、情報を効果的に活用できる
主な対象	学部1回生	学部1,2回生	学部2,3,4回生	学部4回生、大学院修士課程	大学院生以上
1. 情報探索計画を立てる 大学という場での、学習・研究にふさわしい情報の探索を計画する	□ 学内の図書館を適切に利用できる。 □ 京都大学が提供している電子ブック・電子ジャーナル・データベースの存在を把握している。	□ 図書、雑誌、新聞、視聴覚メディア・インターネット等、情報・メディアの種類や特性を説明できる。 □ 貸出・予約・レファレンスサービス等、文献入手に関わる図書館サービスを利用できる。	□ 調査テーマに関する先行研究の検索を行うことができる。 □ 課題の解決に適した信頼性の高い情報源を推測できる。	□ 自身の専門分野において、どのような学術情報が、どのタイミングどの媒体で発表されるのかを把握している。 □ 情報探索計画の実施においてプロセスを把握できる。	□ 遺漏の無い徹底した先行研 究の検索ができる。 □ 自身の専門分野以外においても、自分の研究テーマに関係がある先行研究を幅広く検索ができる。
2. 情報を的確に入手する 探索計画に基づき、必要な情報を適切・効率的に入手する		□ 図書館の蔵書検索ツールを利用し、指定された資料を検索できる。 □ 参考・引用文献リストを適切に読み取り、調査に活用できる。	□ 課題に応じて適切なメディア（図書・雑誌・新聞・視聴覚メディア・インターネット・人的情報源）を選択できる。 □ 文献検索の検索語（同意語・上位語・下位語）を工夫し、演算子(AND・OR・NOT)を利用し、データベースを検索できる。 □ 自身の研究テーマに合致した、適切なデータベースを選択することができる。	□ 望ましい情報が得られなかった場合、行った検索プロセスを評価し、データベース・検索式・キーワードなどを見直すことができる。 □ 他機関の図書館から文献を取り寄せるなど、図書館のサービスを必要に応じて利用できる。	□ 情報の所在とアクセス方法を理解し、必要に応じて、国内外の図書館以外の機関(公文書館・官公庁・NPOなど)から情報を入手できる。
3. 情報を評価し、整理して管理する 収集した情報を活用する前に批判的に分析し、整理・管理する		□ 学術的な文章の要旨をまとめることができる。 □ 情報を取捨選択し、活用できるように整理できる。	□ 入手した情報の正確性と、調査テーマとの関連性を評価できる。 □ 資料リストを作成し、管理できる。	□ 批判的思考をもとに、入手した情報の論理性・合理性・正確性・関連性を評価・分析できる。 □ 文献管理ツールを使用して、収集した文献情報を活用できるように整理できる。	□ インパクトファクター等の評価指標の特性を理解し、情報の評価に活用できる。 □ 学会誌の書評などを参照し、新しい研究成果を適切に評価できる。
4. 情報を適正に活用・発信する 研究倫理に留意し、また適切な構成でレポート・論文を書く		□ 一般的な体裁に則ってレポートが書ける。 □ 引用と剽窃の違いが説明でき、適切に引用できる。 □ 参考・引用文献リストを作成できる。	□ 事実的・理論的な根拠を示しながら、問題提起に対応した主張を論理的に述べることができる。 □ 図表・音声・画像を適切に活用できる。 □ 知的財産権・著作権・個人情報保護等の情報倫理に配慮できる。	□ 情報を活用するプロセスや明瞭性・正確性を把握できる。 □ 学術論文の構成に沿った文章を記述できる。	□ 論文を投稿する際に最適なジャーナルが選定できる。 □ジャーナルの規定や査読者への対応を十分に理解した上で投稿する。 □ 研究成果をどのような形で発表するのが最も効果的なのか、戦略を立てることができる。 □ オープンアクセスの意義とメリットを説明できる。 □ 学術研究において求められる倫理的配慮を留意できる。

「高等教育のための情報リテラシー基準　2015年版」（2015年3月　国立大学図書館協会教育学習支援検討特別委員会）」を基に作成

科目ナンバリング	U-LAS30 20021 LJ13						
授業科目名 <英訳>	大学図書館の活用と情報探索 University Library Data Searching			担当者所属 職名・氏名	附属図書館　准教授　北村　由美 経営管理大学院　教授　松井　啓之 人間・環境学研究科　教授　須田　千里 情報学研究科　教授　黒橋　禎夫 薬学研究科　教授　金子　周司		
群	情報学科目群	分野(分類)	(各論)			使用言語	日本語
旧群	A群	単位数	2単位	週コマ数	1コマ	授業形態	講義
開講年度・開講期	2020・前期	曜時限		配当学年	全回生	対象学生	全学向

[授業の概要・目的]

大学図書館は、図書だけではなく、学術雑誌やオンライン・ジャーナル、文献管理ツールなど、様々な学術情報と、それらの活用方法を教授している場所である。京都大学図書館が提供している膨大な資料群や、ツールをどのように使いこなせるかで、大学における学習の質が変わってくる。

本授業では、このような京都大学図書館の提供する様々な学術情報の活用方法をテーマごとに講義と演習を組み合わせ、段階的に学習する構成となっている。

講義では、理系・文系双方にわたる専門分野の異なる教員陣によって、各分野における情報の組織化と活用方法の歴史や現在について学ぶ。その後、各講義を踏まえ、図書館職員のサポートのもと、図書館やデータベース などの文献検索ツールの演習を行い、大学における学習に必須である文献調査と先行研究レビューの手法を身に着ける。

第10回～14回の総合演習では、それまでに学習した文献調査と先行研究レビューの手法を駆使し、グループプレゼンとレポート作成を行う。

[到達目標]

・効果的な文献探索手法を身につける。
・データベース検索や図書館での文献探索を通じて得られた学術情報を整理して、大学の授業で要求されるレポートの作成や発表を行うスキルを身につける。

[授業計画と内容]

・文献探索手法を身につけた上で、これまでのどのような研究がされてきたか、どのようなことが分かっているかを把握する文献調査を行い、「新たな着想」をするための準備をする。
・インターネット上にある情報の評価方法を学ぶのみならず、学術情報を管理している図書館や、文献データベース提供企業が、どのような論理で情報を組織化しているのかを理解する。
・身につけたスキルを駆使して、文献を活用し発表とレポート作成を行う。

具体的な授業内容：
第1回：「大学図書館の魅力と研究活動」（講義）＜担当：松井啓之＞
高校までの図書館や地元の公共図書館とは全く違う、大学図書館の魅力と研究活動を理解する。

第2回～第4回：「資料調査の入り口」（講義・演習）＜担当：須田千里＞
膨大な資料から、自分が必要な情報を探す際の基本的な考え方とスキルを学ぶ。

第5回～第7回：「情報の組織化と検索：理論と実際」（講義・演習）＜担当：黒橋禎夫＞
情報をどのように組織化・分類するかは視点によって異なる。その基本的な考え方や歴史、類似性

大学図書館の活用と情報探索(2)へ続く↓↓↓

に基づく組織化、さらにウェブの検索エンジンや情報推薦の仕組みについて学ぶ。

第8回～第9回：「インターネット検索の落とし穴とデータベースの活用方法」（講義・演習）
＜担当：金子周司＞
データベースの活用法やインターネット情報の落とし穴を理解し、実際に活用できる学術情報をオンラインで収集する方法を学ぶ。

第10回～14回：「総合演習」＜担当：北村由美＞
これまで学習した知識とスキルを活用して、発表とレポート作成を行う。

第15回：フィードバック

[履修要件]

ECS-IDを取得していること。

[成績評価の方法・観点]

成績評価：
演習課題：70%
発表：15%
レポート：15%

[教科書]

使用しない

[参考書等]

（参考書）
授業中に紹介する

（関連ＵＲＬ）

http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/modules/support/index.php?content_id=3(授業用ウェブサイト)
http://ocw.kyoto-u.ac.jp/ja/general-education-jp/library2015/note(OCW講義ノートURL(2015年度))

[授業外学修（予習・復習）等]

・各演習で出された課題を通して予習・復習を行う。
・一部の授業は、反転授業になっており、事前にオンラインで授業内容を学習した上で、授業に臨む形式になっている。
・総合演習に向けて発表準備を行う。
・必要に応じてグループで課題に取り組む。

[その他（オフィスアワー等）]

・これから大学で様々な事項を学ぶにあたり、図書館およびオンラインデータベースを含む図書館資料(情報)の活きた利用法、調べ方の実際を知り、スキルアップに役立ててください。

・履修にあたっては、パソコンの基本的操作ができること（日本語入力ができる・文書作成ソフト／テキストエディタが使用できる・レポートをメールの添付ファイルで送信できるなど）が望ましいです。

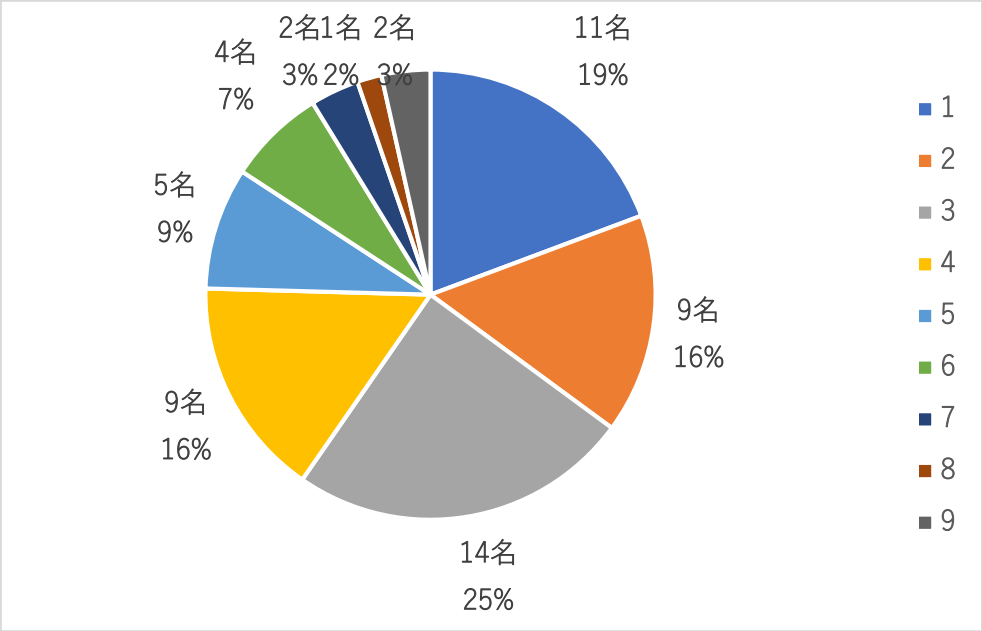
・オフィスアワーは設定していませんので、必要に応じてメールにてアポイントメントをとって下さい。

＜参考資料 3：アンケート結果＞

1．演習補助者を担当した年数

担当年数	1	2	3	4	5	6	7	8	9
人数	11	9	14	9	5	4	2	1	2

*有効回答 57 件



2．演習補助者を担当した年で、特に印象に残った年と、印象に残った理由。

2-1．課題、問題作成及び採点

- 検索用の問題を作成するのに苦労した記憶がある。
- 2001：作成した演習問題が『大学生と「情報の活用」』に掲載されたため
- 2004 年　適切な課題を考えるのが難しかった。
- 2006 年度。演習課題の作成過程で、同じチームの担当者と昨年度までのものを踏まえよりよいものをと試行錯誤したことが印象に残っている。
- 2010 年分類担当：ソーシャルタギングの一例として「はてなブックマーク」を使った演習課題を出したところ、受講生のタグ付け行為がスパム扱いされてアカウント停止になり、課題に影響があったため。
- 2004 年/2005 年とも。演習問題の作成や採点は、それ以降経験がなく印象に残っている。
- 2001-2002 年度、金子先生のデータベースの授業の補助。課題の検討が大変で、かつ、やりがいがあった。
- 2009-2011：データベースを活用した演習問題の設定と採点が難しかったから

採点。こんな重要なことも図書館員でさせてもらえるのかと感心した。大変だったが。

2-2.　百科事典で文献を探す授業

- 百科事典で文献を探す授業。百科事典等で文献を探す時の学生のこういった方法でも探せることができるのか、といった驚きの顔が印象的だった。別の授業で同様の方法で学生に探索してもらい、百科事典にとても興味を持ってもらえた。
- 2003、百科事典で文献を探す授業の演習補助者を務めた。研究活動の手順を基礎から教えてもらえ、自分も学生の時にこのような講義があれば受講したかったと思った。

2-3. 担当初年度

- 1 年しか担当しませんでしたが、分類と利用者の検索行動とをどのように結びつけるかを考えるきっかけとして貴重な経験だった。
- 2001 年。初めて担当となった年であるため。
- 2002 年、１度のみ参加しました。
- 2003、入社 2 年目で初めて演習補助者として携わって、授業を担当する緊張感と重責と覚えた。
- 2009 年度　初めての補助者と同時にチーフを引き受けることになり、とにかく恐ろしかったため。
- 2011、はじめて演習補助者となり、演習補助をすること、課題の作成や採点等、苦労も多かったが新鮮な経験だったため
- 2011　はじめて授業に参加して学生の反応を見ることができたため
- 2013 年、はじめての担当だったため、多くの授業の演習補助をさせていただいたことと、先輩方のメールでの相互チェックが頻繁でしっかりした検討の上で授業に臨まれているのだと感銘を受けたため。
- 2019 年、担当初年度だったため

2-4.　チーフ、リーダーの経験

- 初めての演習補助でいきなりチーフだったので（2 年とも）、担当教員とのやりとりや、チームメンバーの取りまとめがたいへんだった。担当の目録については、図書と雑誌の違い（永遠のテーマ？）をいかに伝えるか、メンバーとあれこれ考えたことが印象深い。
- 2003 年度　チーフを担当し、教員とのやり取りがあったため
- 2004　グループリーダーとして登壇し、実習の説明および実演を行ったから
- 2009：班長だったため
- 2011 年度：初めてチーフを務め、試行錯誤した。

- 2014 年。理由の一つとして、過去 2 年担当していたパートで、この年はチーフとして取りまとめを行う機会を得た点がある。当時の所属の業務ではイベントや企画を取りまとめる機会がほとんどなかったため、チーフを務めることを当初は不安に思っていた。しかし、過去に補助を経験したことのある授業であったことと、フラットに話を聞いてくれる教員と職員に助けられ、業務を全うすることができた。授業支援に携わることは、図書館の知識を得られる点でメリットがあると感じていたが、この年は特に仕事の進め方についての気づきが多いと感じた。
- 2017 年。自身がチーフをつとめ、YouTube に事前学習用動画をアップして反転授業の試みをするなど、従来にない実践をおこなった。

2-5. システム、授業形態等の変容

- 2007 年　最初に担当した年度と担当内容がかなり変わっていたから
  2012 年：担当教員や担当補助者が変わると内容も大きく変わるということが印象的だった。
- 2012 年から 2014 年にかけて、アクティブラーニングの導入に対応するかたちで、参考パートの講義・演習と総合演習を統合し、グループワークを取り入れた点がある。こうした授業形態の変化のなかで、より効果的な進め方や、グループワークを行う学生たちへのサポートの方法について、試行錯誤する場面が多かったことが印象に残った。
- 2013-2014 年度　講義や演習を通して個人個人が学ぶだけではなく、学んだことをアウトプットすることや、受講生同士でピアラーニングするといった要素を取り入れ、授業構成・内容を大きく変化させていった年だったように記憶している。設定したテーマに沿って、グループワークで文献等の調査やディスカッションを行い、最後に研究内容をまとめてプレゼンをしてもらったが、各グループが限られた時間の中で興味深い発表をしていたように思う。最初は先生や補助者らも試行錯誤な部分があったかと思うが、問いを立てるところから文献調査・情報探索、整理、アウトプットの一連の流れを実体験するのが最も有効だと思うので、今後受講生の皆さんが大学での学びを進めていくにあたり、より一層役に立つ内容になったと思う。
- 2014 年。分類の授業では初めて附属図書館の書架を用いてグループワーク形式の演習を行った。想定するのが難しく不安もあったが、無事学生たちがグループで協力して課題に取り組んでいたのが印象的であった。
- 2015 年/総合演習のパートで初めて本格的に PandA を導入して、課題提出などにも活用してもらった年だと記憶している。この後から、PandA が授業全体で積極的に使われるようになった。

- ″2017 年度
  2 月のチーフ会議で、授業全体をとおして反転授業を取り入れることが説明され、4 月以降の授業に向けてチームごとに方法を検討した。担当だった「情報の組織化と検索」では教員と補助者がそれぞれ予習ビデオを 1 本作成することになり、動画（パワーポイントのスライドに音声をつけたもの）を作成した。音声の録音やパワーポイントの動画化等、初めて取り組むことだったので特に印象に残っている。″
- 2019 年、今までと授業の流れを変更することになり、総合演習のチームとも協力しながら様々取り組んだため。

2-6. 新型コロナウイルスによる影響

- 2020 年は、新型コロナウイルスの影響で状況が読めないなか、いろいろな準備を手探りで進めた年だったので、やはり印象に残っている。
- 本年度が初参加のため、これまでとの比較はできないが、本年は初めてのオンライン授業でしたので、やはりこれまで以上に工夫が必要とされたのではないかと思う。
- 2020 年。初めてのオンライン授業であり、附属図書館で例年行っていた実習をどのようにオンラインでできるものにするか試行錯誤が必要であったため。
- 2020 年、新型コロナ感染症対策としてオンライン授業の導入が印象に残った。
- 2020 年　初めてのオンライン授業だったから。
- 2020 年度のみの担当。初めて担当したがオンライン授業での実施となり、実施方法に気を配った。例年の雰囲気が分からず残念だったが、演習補助者、受講生、教員みなすぐにオンラインに慣れ、特に受講生は顔も知らない相手とグループワークもこなし、驚いた。

2-7. 担当者の負担

- 採用後間もない頃で日常業務にも余裕がなく、授業内容も理解しているとはいえないまま担当したので、今思えば反省ばかりだ。2010 は班のチーフになったと記憶しているが、前例踏襲で精いっぱいだったように思う。
- 2012-2016　全ての仕事に不必要なまでの手間と労力がかかりすぎていて何もかもストレスだった。会議や打ち合わせも多い上に、講義に関わる人が多すぎて疲れた。
- 2017 年、2019 年
  事務総括の立場でありながら、演習補助者が確保できなかったため、「資料調査の入口」の実働メンバーもせねばならず、とても負担が大きかった。

2-8.　その他

- 演習補助自体よりも、1997 年の準備段階で、参考調査掛長が各種の調整を一手に引き受けて実施していたことと、1999 年での教科書出版に係る参考調査掛長の奔走ぶりが印象に残っている。

- 2002 年　附属図書館で実際に参考資料を使って調べる実習のコマが、ちょうどサッカーワールドカップの日本戦と重なって、出席者がすごく少なかったのをよく覚えている。内容と関係なくてすみません。
- 2004 年　他大学から異動してきたばかりで OPAC の使い方など（#とか*とか）を一緒に学んだような気がする。
- 2009 年（だったと記憶しているのですが、あいまい）　約 100 人の受講者で検索演習を行ったところ、図書館システム巻き込んで KULINE がダウンしたこと。高々100 人のアクセスでダウンするほど脆弱なウェブサービス上に業務の根幹が乗っていることに驚いた。
- 2010 年のソーシャルブックマークによるタクソノミー分類
- 2007：協力教員全員の講義を聴講して、これほどの内容を聞くことができるのはとても贅沢だと思った記憶がある。
  2008：自分たちで試行錯誤を繰り返して、授業を作っていくことに楽しさを覚えた。〃
- 2008 年
  分類の演習を考える際に、いろいろな提案をして、当時のメンバーといろいろな議論ができたこと。

3. 演習補助者として大変だったこと

*有効回答 58 件

４．現在の職場で開催されている学術情報リテラシー関連業務の内容

4-1. 講習会の開催

- データベース講習会
- 過去に開催されたことのある講習会（SciFinder,Web of Science,EndNote basic,Scopus,オープンアクセス,論文投稿セミナー）
- 文献の探し方や文献管理ツールの使い方に関する講習会を定期的に行っていると聞いている。

- 授業内外での図書館利用案内、データベースや文献管理ツールの講習会、外部講師を招いた講習会（出版社・電子リソース提供元など）
- 文献管理講習会、EJ/DB 講習会、レポート講習会など
- 年間約 20 コマの授業支援と年間約 12 回の講習会を行っている。主な内容は、レポートの作成方法や EJDB の使い方。
- 薬学部図書室では薬学年間計画として SciFinder 講習会を開催することになっている。
- 初心者向け講習会 EndNote basic（講師：ユサコ株式会社）：EndNote basic の使い方
- ライティングサポートとして、テーマ設定、情報検索、執筆の作法等についての講習会を開催している。

4-2. 授業・講義の実施、支援

- 情報基礎演習(工学部)という必修授業のうちの 1 コマの半分ほどの時間をもらい、図書館の使い方、学術情報の検索方法について講義している。（今年度はコロナ禍で資料配布型となった）
- 授業の中で図書室の紹介やサービスを説明する
- 「工学系学術情報リテラシー（基礎）」として、工学部 1 回生の授業の 1 コマ分で学術情報リテラシーの演習を図書職員が担当している。
- ・社会健康医学系専攻「文献検索法」：PubMed の使い方
  ・人間健康科学系専攻修士「人間健康科学特論」： 医中誌 Web、PubMed の使い方
  ・医学科 4 回生 G 講義チュートリアル（医療経済学）：Google Scholar、医中誌 Web、PubMed の使い方
  ・医学科 1 回生「医療情報リテラシー」 ：医中誌 Web、PubMed、EndNote basic の使い方
  ・附属病院看護部「実践 III（3 年目研修）」：医中誌 Web の使い方
  ・人間健康科学科 3 回生向け 「医学文献の探し方」：医中誌 Web、PubMed の使い方
- 工学研究科では「情報基礎演習」（学部 1 回生向け）の 1 コマを使って、「工学系学術情報リテラシー(基礎)」と題して図書館職員による授業を行っている。
- ・ベンダーによるデータベース講習会
- 工学部生（主に 1 回生）対象の授業支援として、1 コマ担当している。
- 「地域環境工学概論」授業補助、「情報基礎演習（農学）」授業補助
- 工学部新入生の全員を対象に、一コマ一時間分で情報リテラシーの授業を担当している。

4-3. 講習会、授業・講義の開催

- 利用支援掛による授業へ出張してのリテラシー教育支援、附属図書館で行う講習会

- ″講習会に関しては、職員が講師を担当する図書館主催の講習会を毎年実施している。およその開催時期と実施内容は次のとおり。5-6 月: レポート執筆支援（初級・中級）、10-11 月: EJ・DB 利用法、文献管理。授業支援に関しては、教員からの求めに応じ、授業内で図書館職員によるレクチャーを実施している。レクチャーの内容は、レポート執筆のための図書館活用方法、文献調査のノウハウ、新聞資料の探し方などである。2019 年度に授業支援を実施した授業は次のとおり。近世西洋史学，英語リーディング，スペイン語 IB，ヨーロッパ歴史・社会論基礎ゼミナール。
- 年度当初のオリエンテーション（今年度はほぼ中止でしたが）や、EJ・DB の利用や著作権・研究倫理等について、授業（医学科・看護学科）・講習会・研修（学生だけでなく、看護師など含む全学向け）を年間通じて開催している。
- 職員による講習会（文献収集、論文公正、文献管理）、ベンダーによる講習会（執筆・投稿）、授業補助（情報基礎演習、その他）
- 附属図書館研究開発室教員による授業実施、図書館機構・附属図書館利用支援課（サポートデスク含む）による授業支援、講習会の開催

4-4. 学習サポートデスク

- 学生サポートデスクによる講習会（留学生向けも含む）
- 学習サポートデスクによるピアサポート
- 学習サポートデスクによる学習相談受付、オンライン学習相談、オンライン講習会（文系レポートの書き方・実験レポートの書き方・LaTeX の実習・文献の探し方）

4-5. ガイダンスの実施

- 通常であれば、新入生ガイダンス等は実施しているが、今年度はコロナ対策で未実施。
- ・授業の１部を使った演習型ガイダンス
- ガイダンス
- 新入生ガイダンス、留学生ガイダンス
- 研究科新入生に対するガイダンスはおこなっているが、その他の講習会はおこなっていない。

4-6. その他

- 現在の職場では掛の所掌でリテラシー教育には携わっていないが、学術情報を巡る状況の変化が著しいため、「正しい情報を見極める」ことの重要性について、学生に知ってもらう必要があると感じている。
- 現在の所属機関では学生数がごく少数のため体系的な学術情報リテラシー教育はおこなっておらず、レファレンス等で個別対応している

5．5. 学術情報リテラシー教育に関連して、演習補助者としての経験が活かされたと感じ

たことを具体的に

5-1. 授業、授業準備等

- 工学研究科での学術情報リテラシー授業を計画・設計するにあたり、大学図書館の活用と情報探索で触れた内容について取り入れることができた。
- 後に、リテラシー教育担当として、授業の一コマを補助することになった際、学生がどの程度の理解で講義に臨んでいるかをよく理解して補助ができた。
- 実際の授業において、演習問題の作成や授業準備を経験できたこと。
- リテラシー教育を担当する際の、内容の組み立て・資料作成。具体的でなく申し訳ないですが、どうすれば分かりやすいか、伝わるかを常に考える姿勢を、採用2年目から演習補助者として参加することで身につけられたように思う。

5-2. 学習サポート、学生支援

- 京大生とは言え、万能ではなく、躓くところは割と似たようなところなので、その後、学生に利用指導する時もここを教えると納得感が高いというか、ツボを押さえた助言ができたかと思う。
- ・演習時に学生が検索している画面の入力・ポインターの動き、本棚を探しているときの目の動き等、探索行動をじかに見ること・体験することで、どこに躓き・見落としポイントがあるのかが実体験として分かり、その後の情報検索においてサポートを的確に行うことが可能となった。
- 学生への働きかけの距離感や図書館資料紹介の基本
- 図書館にあまり関心がない学生がつまづきやすい行動パターンや検索キーワード設定等について、ある程度予測できるようになったこと。
- 他の授業においても、例えば、雑誌論文は検索するのが難しいなど、学生は似たようなところでつまずくので、対応がしやすくなった。
- 学生への援助方法

5-3. 自身の業務への活用

- 補助者としてOPACの使い方を詳しく調べたので、カウンターで説明する際に困ることはなかった。しかしながら、主として整理系業務につくことが多かったのでそのような機会にはほとんど恵まれなかった。
- 資料の作り方や見せ方、説明の仕方等が、部局開催の講習会でも活かせたと思う。
- KULINEやDB等、演習補助をするために集中的に使用したことで、カウンター等で利用者から質問を受けたときに、ある程度スムーズに回答することができた。
- イベントや講習会の実施において、演習補助者の経験は、実施計画の作成や発表資料作成の面などで参考になった。また、Sakaiを用いたPandAを演習補助者として用いたことで、同じSakaiを用いたCyber Learning Spaceをオンライン講習会実施の際に操作する助けになったと感じている。

- イベントや講習会の実施において、演習補助者の経験は、実施計画の作成や発表資料作成の面などで参考になっている。また、Sakai を用いた PandA を演習補助者として用いたことで、同じ Sakai を用いた Cyber Learning Space をオンライン講習会実施の際に操作する助けになったと感じている。
- 整理部門では利用者の顔を見ることがほとんどないが、業務が利用者の、資料へのアクセスにつながることは業務遂行上の視点として維持し続け、周囲にも伝える必要を感じる。
- 資料の作成方法
- 演習補助を経験してから 10 年ちかくたつが、その間サービス系業務に携わっているので、京大内の他部局や、現在出向している滋賀医大においても、今まで蓄積してきた経験をもとに取り組むことができていると思う。
- ネット検索だけでなく、参考文献等から関連の文献や研究者を辿っていくなど基礎的な検索方法も伝えることがあった場合など。
- 学生が実際にどの程度の情報探索スキルを持っているのかを体感することができ、それをもとにレファレンスやリテラシー教育に取り組んだ。
- KULINE での効率のよい検索方法（前方一致や完全一致検索）、図書と雑誌の違い、論文の探し方がわかったことで、文学研究科図書館でのレファレンス受付時に適切な指導ができた。

5-4.　その他

- 課題等に対し、主体的に取り組む姿勢が身につき、医学図書館から様々な提案ができたように思う。
- 利用者への伝え方（わかりやすい言葉で情報を詰めすぎに伝えること）
- 就職するまでほとんどパワーポイントを使ったことがなかったので、自身の職場での講習会スライドを作成・編集する前に慣れる機会があってよかった。
- プレゼン技術や授業用の資料の作成方法の基礎を学べたこと
- プレゼン技術や授業用の資料の作成方法の基礎を学べたこと
- 聴衆が何人いる状態での発表でも、準備さえきちんとしていれば緊張しなくなった。
- ・パワーポイントでの資料作成に慣れることができた。
  ・大勢の学生の前で講義をすることで、プレゼンテーションへの苦手意識がなくなった。
- これまで Endnote を使う機会がなかったので、演習補助を通して学ぶことができたと思う。

6. 4 と 5 に直接関係のない場面で、学生相談や、教員対応など、演習補助者としての経験が活かされたと感じたこと

6-1. 学生対応

- 演習補助の準備の過程で検索方法などで知らなかった方法を身に着けることができたので、その後の学生相談などで役立ったかと思う。
- 文献管理ツールに関する問い合わせに回答する際などに、演習補助者としての経験が役に立っていると感じた。補助者として、実際にツールを使ってみたり受講生に説明したりする中で、ツールに対して理解を深めることができた。
- 学生が求めていること、あるいは学生自身まだ気づいていない疑問はないかと、（先回りして）利用者目線で考えるようになったと思う。

6-2. カウンター業務、利用者対応

- 電子リソース掛で利用者からの問い合わせに対応する際に、この演習を通して OPAC からの電子ジャーナルの使い方等を自分が理解できていたことは大いに役立ったと思う。
- ・全般の質問事項において、質問者はストレートに聞いてくることが少ないため、本当は何を探しているのか、丁寧に聞き取ることが必要、ということ。
  ・冊子体が使えないとき、インターネット情報や電子化されている書籍の存在、予約方法等、概ね何らかの代替え手段があるので、それを提示できるようになったこと。
- 演習補助のなかで得られた図書館や図書館情報学の知識は、レファレンスの場面などで役に立っていると感じている。
- 学生の教育に直に関わることにより、学生の様子を感じることができ、カウンターでの対応の仕方の何かしらのヒントになっていると思う。
- カウンターの窓口での KULINE や各種データベースの説明

6-3. スキルの向上

- 工学研究科電気系図書室で一人職場であったときに、電気系の資料探索や資料の特徴について１から勉強する必要があった。具体的にどのように活かせたかということは書きづらいが、演習補助者としての経験からスムーズに電気系の資料について精通することができたと思う。
- 学内のいろいろな人と企画・調整するスキルが身につくきっかけとなった。
- 多数の前で説明を行ったのは初めての経験だった。その後何度か経験しているが、場数を踏むためにも良い契機となった。
- 先生とのやりとりや学生の前で話すことも、少しずつではあるが緊張しなくなってきたかなと思う。
- ５とは異なる場面でも、伝え方に関することは活かされていると思う。

6-4. データベースの理解

- データベースの使い方や資料の探し方等は自分自身の役にも立った。利用者への案内の仕方も参考になった。

- 図書館システムや大学が契約しているデータベースへの理解が深まった。
- DB の使い方を聞かれた際にスムーズに回答できるようになったように思う。

6-5. 教員、補助者とのコミュニケーション

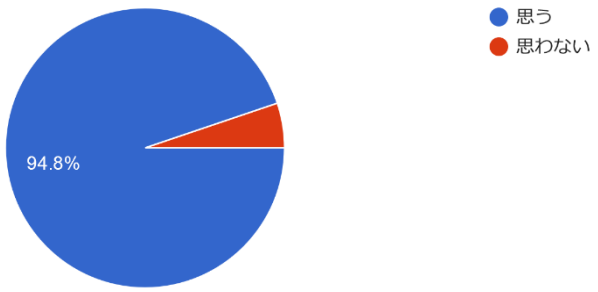
- 先生と直接メールをやり取りする経験などは、おそらく、その後にも活かされたのではないかと思うが、具体的には思い出せない。
- 担当教員や他の演習補助者との連携・コミュニケーションについて経験が活かされた。
- 採用後すぐに、教員の研究室に打合せで訪問したりすることもあり、教員への対応について学ぶことが多かった。
- 担当の先生方といっしょに同じ仕事に取り組めたことが後々の信頼感につながっていて今の仕事でも役に立っていると思う。
- 教員の専門分野について理解を深める際になど活かされたように思う。

6-6. その他

- 京都大学における授業の一端を知ることができた
- 授業での Zoom 活用の方法。授業支援までのスピード感。
- 資料の紹介
- 整理系や研究所の所属だったので、学部生と接する機会が少なく、演習補助者として学生と関われたのはよい機会であった。いろんな図書室の分類を見に行ったり、普段触らないデータベースを利用したりと自分の糧になることではあった。ただ、その力を普段の情報リテラシー支援として利用者に還元できる機会は少ない。
  自分の学生時代の学び方（情報探索方法）以外を知る機会でもある。
- 図書館の専門用語をできるだけ使用しない説明を心がけるようになったこと。
- 質問の趣旨とずれるかもしれないが、附属図書館の学部生向けアルバイトに応募してくる人で、授業の受講者が何名かいた。顔見知りである分、話しやすかった。この授業をきっかけに、図書館により興味を持ってくれるのではないかとも思う。
- 大学における授業に運営側から参加できたことで、図書館という場以外での大学におけるリアルな学びが肌感覚で身に付き、以後の様々な大学図書館職員としての業務に活かすことができていると感じている。

7. 京都大学図書館機構が担う学術情報リテラシー教育を進める上で、演習補助者を経験するのは意味があると思うか

有効回答：58 件



8.　7 で「思う」と回答した場合、学術情報リテラシー教育を進める上で、演習補助者を経験することが他の研修など比較してどのような意味があると感じているか。

8-1.　授業（の現場を）知る

- 実際の授業の様子を垣間見ることが出来たので、意味があったと思う。
- 京都大学の 1, 2 回生に必要な内容・レベル、講義や演習の進め方を知ることができる

8-2.　学術リテラシー教育の理解

- 学術情報リテラシー教育の全体像を図書系職員が理解する手がかりとなるだろう。
- 異動の状況によっては、学術情報リテラシー教育にほとんど関わることのない職場も多いなか、多くの演習補助者の方と意見交換をしながら学術情報リテラシー教育について体系的に学ぶことができるうえ、学生や教員対応など、他の研修では得ることのできない経験を得ることができ、京都大学の学生や教員のおかれている状況や図書館機構の学術情報リテラシー教育について理解を深めることに意義があると感じる。
- 教員と協力して授業を実施する過程で教員目線での学術情報リテラシーに対する考えに触れることができる。学生に学術情報リテラシー教育を行う経験を積むことができる。

8-3.　自身の業務への活用

- 利用者に必要な教育とは？という視点で日々の業務を意識できる
- 図書館サービス、学術情報リテラシー教育以前に、大学職員として持っておいて損のない経験であるし、またその経験は図書館の業務を進める上でも必ず役に立つと思う。可能であれば、図書系職員であっても、教務系業務も少し経験すると良いのかもしれない。幅広い経験が関係なさそうな所で、役に立つという話。
- 早いうちからチーフを任される場合もあり、チームのメンバー（先輩も含む）をまとめる役割を経験できることも他の研修にはないメリットかと思う。また、授業で扱う内容自体も、今後図書館職員として働いていく上で大変勉強になるものだと感じている。

- 授業に直接携わることはなかなかないことなので、その経験はその後に活きてくると思う。
- リテラシー教育を担当する職員であっても、日常業務においては比較的短時間の講習になりがちである。そのため、より深い学びになるはずの講義と演習のセットにおいても、学生の理解が不足する事項を知ることは、日常業務におけるリテラシー教育スキルを高めるうえで役立つと思う。

8-4. 実践的な環境

- 現実の学生と向き合うことで、概念ではない実践のリテラシーの現場に身を置くことができた。
- 言い方は悪いが、生の教材なので、迫力というか、知らず知らず補助者となった自分も真剣さが違うのではないかと思う。
- 研修では資料作成やプレゼンの練習はできても、学生の実際の反応を知ることは難しいと考える。やはり実際の授業に携わることは経験値として大きいと思う。
- 実際に受講生に向けて話したり資料を作成したりすることで、研修を受けるだけよりも、より身に付くようになると思う。
- 演習補助では実際に利用者（学生）を相手にするため、ほかの研修に比べて、より学生目線に立つことが求められる。そのため、職員同士のやり取りでは得ることのできない気づきがあると思う。
- 実際の授業に関わるという点で、研修とは意味合いが異なるのではないかと思う。
- 他の座学の研修ではなく、教員とともに学生を相手に行う、実務による完全な OJT の研修である点
- 探索者の行動（目の動き、画面の操作、書架へ行く動作、尋ねてくる質問等）を実体験することができ、初めて大学図書館を使用する者がどういったところで戸惑うのか、すんなり解決できるのか、を身近に見て確認できるところ。その後のサポートや操作マニュアルを作成するときに、ポイントを押さえて、伝えることができる。
- 実践的な取り組みであり、大きな経験になる。管理系でも学生と接することができる。担当教員と直接講義を担当できる。
- 研修は定められた期間で与えられた課題に取り組むことが多いが、演習補助者は、半年間の授業を他の補助者や教員と協働し主体的に取り組む機会となること。
- 他の補助者と協力して実際の授業を担当して教育に関わることで、大学の学生の実態をつかんだり、他の補助者から知恵やノウハウを学ぶことができるとともに、自分自身でも努力するので学びの成長にもつながると感じる。
- 実際の利用者である学生に対して行うため、他の研修と異なり、利用者の反応を直接間接することができる。

- 座学や内輪だけのブレストではなく、テーマに沿って問題を作成し学生に実際に解かせて採点する、という一連の活動に意義があると感じている。その説明や問題で学生が理解できるか、次のステップに進めるか、あるいはＸ年後に何らかのお役立ちになるか、といったことを考えながら内容を考え構成を組み立てるのは、意義深いと思う。
- 実際に学生さんが課題に取り組む姿を見ることができ、かつ、アンケート等でどのような点がわかりにくかったのかのフィードバックを得られるあまりない機会であるので、他の研修とは異なる経験を得られると思う。
- 研修ではなく実践で、学生の教育という大学のミッションを先生と同じ立場に取り組める貴重な機会。
- 自分たちで準備した内容が直接授業に反映され、学生からのフィードバックも得られる点。
- 実際に学生さんを前にして質問などに対応し、授業内容のわかりやすさなどに対する反応が直接感じられる点が実践的であったと感じる。
- 部署の規模や組織構成にもよるが、所属部署によっては通常業務として学術情報リテラシー教育に携わることがない場合もあるため、演習補助者としてリテラシー教育に関わることで良い経験になると思う。また演習補助を通して先生や学生から直接フィードバックを受けられるというのが他の研修と異なる有意義な点であると思う。
- 教員との調整、実際に受講生と接する、自身で説明を行うなど、様々な要素が含まれており、さらにそれを業務として行うことで、研修よりも効果的だと思う。
- 教員とともに授業を作り上げる、さらにそれに対する学生の反応を直に知るという体験ができる。京都大学の教員がどのような教育を行っているのかを知ることができる。
- 担当教員とのやりとり、演習問題の作成やチームでの検討、授業に演習補助者として学生に対すること、その後の総括等、一連の過程で様々な力が身につくように思うし、大学の授業に参加することは非常に緊張感があると思う。そのような経験は研修ではできない。
- 実践であるため、研修より学ぶものは大きいと思う。
- 教員と組んで一つのテーマを担当することで、そのテーマに関しては、補助者自身も、他では得られない深い学びの経験ができると思う。

8-5.　大学教育の経験

- 教員サイドで関わることによって、大学職員としての自覚や視野の広さなど、特に若手職員には得難い経験になり、その後の職場でリテラシー教育に携わる際にも役に立つのではないかと思う。

- 授業の場には、教員がおり、多くの学生がいて、想定外の事態が頻繁に起こる。大学という環境において、教員や学生と直接に対話する絶好の機会で、対応は大変であるが「大学職員」として貴重な経験ができる
- 京大の教員・学生と直接触れる機会があるということは、この先京大職員として働いていくなかでプラスの経験になる。
- 講師側の視点に立てる点に意味があると思う。
- 教員の講義技術を学べる。

8-6. 学生理解

- 学生の生の動きがわかるから。課題の選択でより回答しやすい（確実に点数を取りやすい）課題を選択する傾向が見えて面白かった。
- 学術情報リテラシーの習熟度が様々な段階の学生を見る機会を得られること。講習会では、図書館に来る／イベントを知っている学生にしかアプローチできないが、授業にはそれ以外の学生もおり、そうした学生へのアプローチについて検討するきっかけになると思われる。
- データベース等について受講生と一緒に学ぶことができ、受講生の疑問点や反応を直接知ることができることに意義を感じる。
- 実際に対面、対話することで、学生のつまずきや、理解を深めていく様子などを直接確認することができる。
- 実際に学生さんの反応をみることで、どういう説明をすれば分かりやすいか、あるいは分かりづらいのか知ることができる。
- 利用者と接することで、どのように情報を検索しているのか、どんなところでつまづきやすいのかを知ることができ、それに対してどのようなサービスができるのかを考えるきっかけになる。
- 利用者と直に接して、利用者目線で業務を考えることができるようになる。
- 学生という、必ずしも発表内容に興味がなく、前提知識を共有しない聴衆に聞いてもらうことはなかなかない機会だと思う。
- 利用者がどのようなところでOPAC等検索につまづくかよくわかる。
- 画面の向こうで学生が授業を受けている姿を目の当たりにすることで、自分が従事している図書館サービスの先に利用者が勉強したり、研究したりしているのだな、と実感することができた。これは、他の研修と違う点だと思う。

8-7. 教員や他の補助者との関係

- 就職したばかりの者にとって、利用者に近い目線で、京大図書館のリソースの活用方法を学べる。
- 必ずしも本授業の演習補助が必須という意味ではないが、図書館という場以外で実際に学生の学びを支援することは意義がある。研修はあくまで本番に向けての学び

の機会であるが、授業支援は本番そのものであるので、実践経験でつかみ取れることの質が深くなると思う。

- 実際に学生の前に出て話す訓練となる。
- 若手を中心に構成されていることもあり、補助者同士の横のつながりをつくるのに役立つと思う。通常業務では会う機会の少ない方々とも関わることができ、他の業務での連絡や情報交換もしやすくなった。
- 他部局の先生や図書系職員と共同できる。（場合によっては）人前に立つ経験を得られる。
- 私は他人、なかんずく大学教員と打ち解けるのは苦手なので役に立ってないが、人によってはそこから人脈が拡がっていったり、図書館経営において教員とうまく協同できたりといった将来への布石にもなるのではないかと思う。
- 担当教員とのやりとり、演習問題の作成やチームでの検討、授業に演習補助者として学生に対すること、その後の総括等、一連の過程で様々な力が身につくように思うし、大学の授業に参加することは非常に緊張感があると思う。そのような経験は研修ではできない。

8-8. その他

- ほぼ授業 1-2 コマを担当する形で責任も伴い、かなりの準備を必要とするので、他の研修と比較すると身につくものも多いかと思う。
- 他の研修との比較とはいえないが、利用者のひっかかるところがどのようなことかを知ることができる。
- 具体的な担当分野をもって講義（演習）の補助や学生へのサポートを行うことは、集合型の研修等とは比べ物にならないくらいの様々な経験を積むことができるので、意義深いと思われる。
- 講義の現場を経験することは、図書館員が企画実行するガイダンス等とは、まったく質的に異質であると考える。TA 業務に近い立場から教授職の高みが垣間見える貴重な経験だと感じた。
- 私が担当した際は演習の内容等かなり踏み込んだところまで職員が担当していたので有意義ではあったたがそれなりに負担もあり、特に若手職員が減少している昨今では体制の維持が難しいと感じる。/人によって捉え方は違うと思う。が補助者を担当することは「業務」で、二次的に自分自身のスキルアップにつながったのであり、「研修」と単純に比較することには疑問を感じる。/受講者が年々減少していることも費用対効果上好ましくなく、現状を維持するのは難しいのではないかと思っている。

- 2018 のときは授業の準備や採点に PandA を利用した。教員の使うシステムの為、職員として利用する機会はない。（存在もほぼ知らなかった）
  学生・教員が使用している学内システムを知っておくことは意味があると思う。

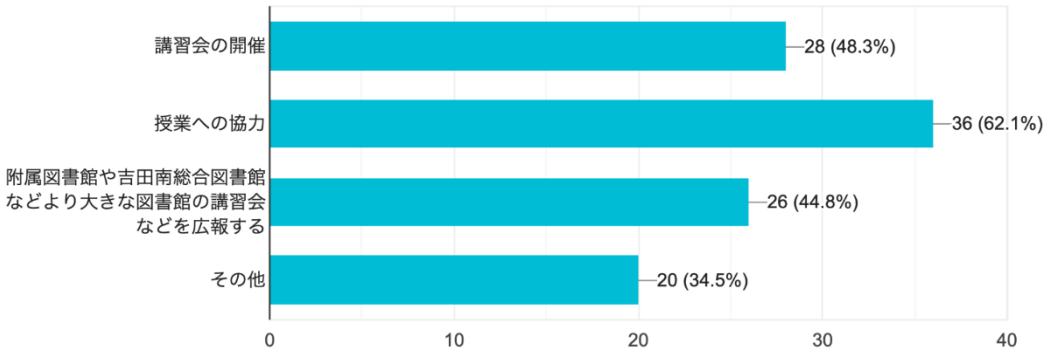
9.　7 で「思わない」と回答した場合、学術情報リテラシー教育を進める上で、演習補助者以外でどのような経験が必要だとお考えるか

- 個人の資質とその時点やその後の業務内容によるのではないか。個人的には、定時内に OPAC の使い方を覚えられてラッキーだった。
- 「学術情報リテラシー教育」なるものを受けること
-

  本授業の演習補助は、担当教員との継続的な連携が必要な点や、単位取得にかかわる演習を担当する点で、他の講習会や授業協力とは異なると感じている。しかし、それが「学術情報リテラシー教育を進める」ことにつながるかどうか、あまりピンとこなかったため「思わない」と回答した。（現在の職場が職員による講習会を年に数度実施しており、授業協力も毎年依頼があるため、他の機会でも色々な経験を得られたことが影響していると考える。）ただ、あまりそうした機会のない職場にいた場合、本授業が学術情報リテラシー教育に深く携わるきっかけとなる点については、学術情報リテラシー教育を進めるために必要な経験だと思う。

10. 現在の職場で、学術情報リテラシー教育を進めていくには、どのような手段が有効か（複数選択可）

有効回答：28



11.　10 で「講習会の開催」を選択された方、想定される講習会の内容をご記入ください。

有効回答：25 件、以下重複あり

回答	人数
データベース利用・活用	9
レポート・論文作成	6
情報、資料・文献収集	5
図書館案内	3

「その他」の内容：

新入生ガイダンス、フェイクニュース・ハゲタカジャーナル対策、教員対象の電子資料利用、院生の研究データ管理、DB や EJ のより専門的な内容、研究倫理、テーマを絞って教員と連携、プレゼンの対面講座

12. 10 で「その他」を選択された方、具体的な内容をご記入下さい。

- SciFinder 講習会のアンケートで判明したことであるが、伝達手段として「教員からの案内」が 100%であることから、教員から学生にこんなことをさせたい（例：3 回生に自宅から電子ジャーナルを使わせたいが可能か）と言われたとき、出来る・出来ないだけを伝えるのではなく、「プラグインインストール」「VPN 接続」「discovery でのオンライン文献の探し方」等トータルにメールで簡単に送付できるテンプレート、あるいは Word/PDF 操作ガイドを送ってもらう、オーダーメイド講習会を請け負う講師の存在等提示することで、教員が担当する授業受講者全員にとても効率良く探索方法を伝えることが可能。教員のちょっとした質問、つぶやきといったチャンスを逃さないようにする。
- パスファインダーなど講習会などに参加不要な教材（の作成）
- ドキュメント作成による誘導。非来館型で永続的効果が継続するメリットを重視している。
- 講習会コンテンツのウェブ掲載など、講習会や授業への参加によらない方法での資料公開を行い、情報教育リテラシー教育のためのチャネルを増やすこと。
- 担当教員とたまに話題になるのだが、院生以上でも入学後まもなく大学に来られなくなる人が一定数出てくる、それでも夜間の図書館（構成員は 24 時間入室可）なら来られる人もいるということ。リテラシー教育とは言えないが、勉強から少し離れたテーマを含め、大学と学生を繋ぐための講習会の企画と場を、図書館が提供できればと思う。
- カウンタワーク・レファレンスワーク
- 大学院の共通教育カリキュラムへの参画、若手研究者向けのセミナー
- 学術情報リテラシー教育を担える職員を養成する。そのためにも、自前での講習会や授業補助を絶やさず継続する必要があると思う。

- ゲーム感覚で、楽しく図書館の使い方や情報探索のスキルを学ぶことができるイベント企画
- 図書館機構として、どこでどのような講習会や授業協力を行うのか、俯瞰的な把握と学生への広報が必要である。

13. 演習補助者を担当した経験から、今後の「大学図書館の活用と情報探索」への意見や助言

- 部局開催の授業のアンケートに、全学共通科目と内容が重複していると苦情を書かれたことがあったので、内容の調整をして、それぞれを「受講してよかった」と思われるようになればいいと思う。
- 図書系職員が参画することの意義自体は大いに認めるところではあるが一方で現在のように新人の正規雇用の図書系職員の採用が極度に抑制されている状況で、図書系職員が参画し続けることは困難ではないかとも考える。他の業務も多忙化する中、一定の職員が続投し続ける状態になりがちなのではないか。
- 2020 年度はわからないが、2019 年度までは学生の受講者数の減少が気になっている。大学図書館の活用と情報探索については反転授業やビデオ予習教材も充実してきたので、他の授業でも活用できるような教材を作成し、より多くの学生に届けばいいと思う。
- あれは、担当教員と図書館職員の補助者で成り立っていると思う。が、学生との協働も良いかも。
- 内容が盛りだくさんで有意義な授業になっているが、大量の課題や発表があって、どうしても受講生の負担は大きくなっていると思う。難しいですが、補助者の負担も受講生の負担も減らせるところは減らしつつ、時代の変化に合わせた授業のやり方を考えていけたらと思う。
- カリキュラムポリシー等との合致はより重要になってきていると思う。ので、より意識した内容構成を目指してもらうのが良いかと思う。
- アンケートに回答しながら、図書館職員による講習会はどちらかというと、各種ツールの使い方に重点を置いているのに対して、「大学図書館の活用と情報探索」では、そもそも（学術）情報とは？、というようなことを考える講義回があるのが特徴で、それを補助者として聞くことができるのは貴重な機会だと思った。
- 演習補助をすることにより学生の生の声を聞ける良い機会なので、なるべく補助者の負担にならないよう業務分担に配慮して、是非この先もつづけていただきたい。

自分が担当した年度が約 20 年前で、それ以降の学術情報を取り巻く環境が著しく異なっており、また現在の授業内容について詳細を知らないため意見を述べるのは難しい。授業のカテゴリも毎年見直しされている（と思う）ので、現状に沿った内容に常にブラッシュアップされていると感じている。

- ここまで継続してきたこと自体、関わった職員の多さから言っても、図書館職員の学術情報リテラシー教育への意識向上という点だけでも大変意義のあることと思う。本題の教育という点では、恩恵を受けるのは少数の受講した学生だけ、という点は少しもったいないようにも思う。が、補助者の経験を各補助者が各々の職場で活かせれば、意味があると言えるだろう。

  また、少数（かつ正規授業の）受講者であることを活かして、過去に受講した学生の追跡調査も可能なのではないか。受講学生が 4 回生になった頃に、授業が役に立っているかどうか、というアンケートを実施しても面白いのではと思う。（もう実施されていたか）。

  下記インタビューは、ずいぶん時間が経ち過ぎて、補助者当時の記憶がほとんどなくて全然役に立てない、という意味で不可とする。申し訳ありません。
- 演習補助者としての経験は貴重であるにもかかわらず、若手の職員が何年も連続で参加し、負担になっていることは否めない。1 年参加すると次の 1 年は休み、掛員だけでなく、掛長・補佐あたりから広く演習補助者に指名するのが良いと思う。
- 演習補助の準備や課題の作成、採点等、思いのほか手間がかかるため、上司や掛内メンバーの理解が得られるような環境が必要だと思う。
- 新規採用者の減少により、長らく、演習補助者の確保が難航しつつある。

  2 年前に、演習補助者の数を減らす態勢に移行したが、それでも、確保できない場合は、利用支援掛でそれを補わざるをえない、という状況になっている。演習補助者の負担を減らし、各チーム 1 名態勢で運営することができないか検討もしたが、現実的なおとしどころは見えない。

  この授業に注いでいる人的コスト(特に利用支援掛の)と、授業を実施することのメリットの双方を可視化し、管理職に、機構の職員で全学的にさらにカバーする態勢を構築するのか、それとも、授業の規模を縮小するのか、といったドラスティックな経営上の判断をする必要があると思う。(このアンケートは、そのためのものかと思う。が。)

- 演習補助は大変だが、利用者の探索行動をじかに見ることができ、ある程度まとまった人数に解決方法を提示できる絶好のチャンス。今後のあらゆる場面に活かそうと思えば、いくらでも活かせるので、ぜひ、一度は体験してほしい。

  紙と電子両方の資料の使い方、公開情報、非公開情報の違い。効率的な情報探索、整理法は今でも必要とされているようだ。特に電子資料の利用はなかなか伝わりにくいため、使いやすい UI と両輪で進めていったほうがよいように思う。

- 現在の閲覧系の業務で、講習会を計画・実施することが増えたこともあり、これまで同授業の演習補助に携わることができて良かったと感じている。
  同授業について、毎年、補助者と教員が連携して手間と時間をかけて準備を行っていた一方で、受講者数を増やせないのがもったいないとも感じていた。
  こう思ったのは 2019 年までの演習を中心とした授業方式の時のことで、2020 年度のオンライン授業で実施方式が変わった現在は、状況が異なるかもしれない。
  もし、当該授業の簡易版を新入生に E-Learning で受講してもらうなど、より広い学生に同授業のエッセンスを学んでもらうことができれば、学内の情報リテラシー教育を広めていく上で有益なのではと思った。

- 今後大学図書館を活用してもらえるような入口となる授業であるとよいと思う。

- 本授業とは長年離れているので的外れかもしれないが、年々ますます図書館なしで、ネットだけで情報は得られる、と思う学生が増えていると思う。「図書館だからできること」を前面に打ち出していくのはどうか。それが何かは図書館が今抱えるテーマに繋がるように思う。ので、知識を結集しての検討のしどころだと思う。
- 図書館が教育組織としての大学の中でプレゼンスを上げていくには極めて重要な授業だと思う。
- 授業に限らないが、解説や演習問題の内容を詰め込み過ぎたり、難しくし過ぎたりしているように感じている。今の学生は漫画雑誌（ジャンプやマガジン等）すら読んでいないようなので、雑誌とは何かといったことから入っていかないと、わかったつもりで結局わかっていない、という結果に終わると思う。
- 昨年担当した際に、グループごとに授業を組み立てている印象を受けたので、全体でもう少しつながりがあり、一つ一つの講義や実習が何を目的として行っているのかが見えやすいとよいのではないかと思った。
  また、10 月後半に会議を控えており時間の見通しが立たないため、インタビューに参加できず申し訳ない。現在出向中で情報リテラシーにかかわる業務をおこなっていないため、全体的に参考にならない回答ばかりとなって申し訳ない。

- 私が参加していたのはだいぶ前なので今は変わっているのかもしれないが、例えば検索エンジンの使い方のような個別のスキルだけでなく、学術情報リテラシーの本質を学べるとてもよい科目だったと思う。最初が「分類」から入るとか、たぶん他の大学ではないと思う。
  先生方が信頼していろいろ任せてくれたのでおもしろかったし、自信につながった。私は最初の方に参加したので、長尾先生のもとで中心となって授業を企画した先輩たちから「元々は図書館員が授業を（補助者ではなく）担当するはずだったが規程でできなかった」と聞いていたので、補助者といっても役割は大きかった気がする。ただ年を追うごとに図書館員が補助的に、業務的に関わるようになってきた気がしていたのと、資料作成などに業務量が増えていたのが気がかりではあった。
  学術情報リテラシー教育を専門とする図書館員として、それを効果的に行う方策を、この授業に限らず追求したらと思う。
- そもそも受講していないこともあるが、自分が所属する部局の学部生ともっと関われればよかった。
- 通常業務をこなしながら、部局をまたいだメンバーと担当教員とのやり取りといった準備、実施はたいへんな労力かと思う。が、これから研究を進めていく学生への支援として有効な授業だと思う。ただ、職員数が少ない中、維持していくのはたいへんである。
- オンライン授業が増えた状況だからこそ、情報探索スキルが重要になると思われる。しかし、そのことに気づかない学生も多いと思う。ので、できるだけ多くの学生に受講してもらえる授業にすればと思う。
- 大学図書館における学術情報リテラシー教育支援の形のひとつとして、「大学図書館の活用と情報探索」は大きな役割を果たしてきたと感じている。一方で、個人的には、図書館職員の人員削減、受講する学生数の減少、学習形態の変化など環境の変化に応じた見直しは必要かと思われる。例えば、リレー講義演習ではなく、個別授業支援（次年度のシラバスが決まる前に対象となる授業を募集し、その授業の演習に 1-2 コマ程度補助者が補助に入るなど）をメインに切り替える、汎用的な部分はオンライン教材化する、など効果的で、持続可能な形で継続できるとよいかと感じた。
- パートごとという側面が強く、授業全体の統一感にやや欠けると思う。今は複数人でパートを担当しているが、それを１人にしてしまって、その４人（４つのパートなので）＋教員で全てのことを話しあう方がいいようにも思う。担当者の負担が増すので、部局所属者の場合は了承を得ることが難しいかもしれない。
- 自身は事務統括しか行っていませんが、特に若手職員には良い経験となっていると思う。ただ、図書系職員も人員が減ってきており、もう少し負担を減らし、無理なく継続する体制を検討すべきかもしれない。

- 実際のところ授業準備の負担が非常に大きく、開講期間中は通常業務が完全に圧迫されていた。常に世の動向は追うべきだが、授業内容としてすでに完成されており、毎年のリバイズに時間と労力をかけ過ぎではないかと思う。
  現状のような講義と実習の組み合わせは理想的ではあるが、E-ラーニング化してオンライン上で学び、課題を提出させるだけでも十分役割を果たせると思う（それくらい敷居が低い方が、学生も気軽に受講できるのでは？）。
- 開講当初は、演習時の進行説明と補助のみであった。現状は補助者の役割が広がりすぎているように思われる。

＜参考資料 4：質問票＞

「大学図書館の活用と情報探索」（旧「情報探索入門」）演習補助者へのアンケート

本アンケートは、図書館機構第二特別委員会の活動の一環として、京都大学図書館機構における学術情報リテラシー教育の実態を検証する目的で行います。京都大学図書館機構の各図書館では、日々の利用者指導や講習会をはじめ様々な形で学術情報リテラシー教育を行っておられると思います。本アンケートは、それらの学術情報リテラシー教育と、図書館機構が続けてきた全学共通科目「大学図書館の活用と情報探索」（旧「情報探索入門」）をどのように有機的に関連付ければよいのかという点について、授業において重要な役割を果たしてこられた歴代の演習補助者の皆さんのご意見を伺うことを目的としています。

検証過程では、アンケートに加えて、一部の方のインタビューを想定しています。本アンケートで得られた結果は、今後の学術情報リテラシー教育の方向性を検討する上で参考にさせていただきます。また、個人情報を伏せた上で、報告書や論文などに活用させていただく可能性があります。回答所用時間は 5 分から 10 分程度です。ご質問がありましたら、お気軽に附属図書館研究開発室の北村までご連絡下さい(kitamura.yumi.5w@kyoto-u.ac.jp)

回答者名：
所属・肩書：
メールアドレス：

1. 演習補助者として授業に関わられたタイミングとその時点でのご所属・肩書と関わり方について教えてください。いずれも、覚えておられる範囲内で結構です。

担当年、所属、肩書、演習補助者として担当された内容をご記入ください。（担当されていた年については、依頼メールに添付している一覧表をご参照ください。）

＊複数年担当されている場合、箇条書きでそれぞれの年度についてご記入ください。

2. 1 であげていただいたうち、特に印象に残った年と、印象に残った理由を教えてください。

3. 演習補助者として最も大変だったのは、どのようなことでしょうか。

①上司や同僚の理解を得ること
②担当教員とのコミュニケーション
③授業内容の準備

④学内の他の図書館・室のメンバーとの連携
⑤その他（具体的に：　　）

4. 現在の職場では、学術情報リテラシー教育に関連して、どのような授業支援や講習会が開催されていますか。ご自身が担当されていない場合でも構いませんので、具体的に教えてください。

5. 学術情報リテラシー教育に関連して、演習補助者としての経験が活かされたと感じたことがあれば、具体的に教えてください。

6.　4 と 5 に直接関係のない場面で、学生相談や、教員対応など、演習補助者としての経験が活かされたと感じたことがあれば、具体的に教えてください。

7.　京都大学図書館機構が担う学術情報リテラシー教育を進める上で、演習補助者を経験するのは意味があると思われますか。
思う
思わない

8.　7 で「思う」と回答された方は、学術情報リテラシー教育を進める上で、演習補助者を経験することが他の研修など比較してどのような意味があると感じておられますか。

9.　7 で「思わない」と回答された方は、学術情報リテラシー教育を進める上で、演習補助者以外でどのような経験が必要だとお考えでしょうか。

10.　現在の職場で、学術情報リテラシー教育を進めていくには、どのような手段が有効でしょうか。(複数選択可)
①講習会の開催
②授業への協力
③附属図書館や吉田南総合図書館などより大きな図書館の講習会などを広報する
④その他

11. 10 で「講習会の開催」を選択された方、想定される講習会の内容をご記入ください。

12. 10 で「その他」を選択された方、具体的な内容をご記入下さい。

13. ご自分のご経験から、今後の「大学図書館の活用と情報探索」へのご意見やご助言あれ

ばご教示ください。

14.　1 時間程度のインタビューでさらに詳しくお話を聞かせていただくことは可能でしょうか。時期は、10 月中旬以降を予定しています。

可　（対面・Zoom・どちらでもよい）
不可

ご協力ありがとうございました。